

蠅

蠅は愛すべきものではない。だがわたしたちが子どもであった頃誰も少しはそれを喜んだ。わたしと兄弟はいつも夏に大人が昼寝をしている際に、庭の瓜の皮やなかごが捨ててあるところで蠅を捕まえた、——蠅は全部で三種あり、小蠅はあまりに小さ過ぎ、肉蠅には汚い蛆がいてあまりに汚く、ただ金蒼蠅だけが役に立った。金蒼蠅はすなわち青蠅である。子どものなぞなぞの中に「頭にゃ赤い飾りの帽子、体にゃ紫羅の長上着」というのがそれである。わたしたちはそれを捕まえてバラの葉を一枚摘んで、バラの棘でそれを背中に刺すと、緑の葉っぱがテーブルの上をもごもごと動き回る。東安市場には紙で作った様々な色の小虫を売っていて、名前を「蒼蠅のおもちゃ」と言ったが、つまり同じ趣向である。わたしたちは又その背中を細い竹ひごに挿して、灯芯草の切れ端を脚の間に置くと上下にひっくり返して振り回すのである。名付けて「戯棍」と云う。またあるいは白い紙縀を腹につけて飛ばすと、空中には白い紙片がひらひらと乱舞するのだけが見えて、とても綺麗である。もし若くて力の強い蠅を捕まえたなら、ハサミでその頭を切り取っても、その体だけは相変わらず飛んでいってしまう。ギリシアのルキアノス

(Lukianos) の「蠅の頌」には、「蠅は頭を切り去られた後も、かなりの時間生きることができる」とある。たぶん二千年前の子どもはすでにこうして遊んでいたのであろう。

わたしたちは今では科学の洗礼を受けたから、蠅が病原菌を伝染させるのを知っている。そのため連中にはとても悪感情を持っている。三年前病院に臥せっていたとき詩を一首作ったことがある。後半に云う。

「大小のすべての蠅たち、
美と生命の破壊者、
中国人の良き友である蠅たちよ、
わたしはお前の全滅を呪う、
人間の力以外の、
最も黒く最も黒い魔法の力でもって。」

しかし実際には最も憎むべきはやはりそいつの別の悪い癖、つまり喜んで人の顔や手足を這い回り舐め回すことである。古人はその名を美化して「美を吸う」と言ったけれども、吸われる者にとっては極めて不愉快な事である。ギリシアにその縁起を説明した伝説があるのは、すこぶる面白い。それによると蠅はもともと一人の処女であって、名をムヤ (Muia) と言い、とても綺麗だったが、あまりにおしゃべり好きであった。彼女も月の神の恋人エンデミオン (Endymion) を愛し、彼が眠っている間にも、彼女はやっぱり彼に話をしたり歌を歌ったりして、少しも休ませなかった。それで月の神は怒って、彼女を蠅に変えてしまった。以後も彼女はエンデミオンを思いつつ、人に安眠させようとせず、とりわけ若い人の邪魔をするのを好む。

蠅の執着と大胆さは、かなりの人の讃嘆を引き起こした。ホメロス (Homeros) は史詩のなかでかつて勇士を蠅に擬えたことがある。彼は言う。君は彼を追っ払ったけれども、彼はいつかな君から離れようとはせず、なんとしてでも一口喰らいつかねば措かなかった、と。またある詩人は

言う。彼の小蠅は極めて勇敢に人間の肢体の上を跳ね回り、渴えて血を飲まんとするが、戦士が敵の鋒刃を避けるのは、まことに恥ずべきことだ、と。わたしたちは幸いにしてあまり血に渴えた勇士に会わないが、勇敢にわたしたちの顔を舐めんものと攻撃して来るのにはしょっちゅうお目にかかる。ファーブル (Fabre) の『昆虫記』には一種の蠅は、土蜂が虫を背負って穴に入る隙に乗じて、虫の中に卵を産み付け、後になって蠅の卵が先に孵り、死んだ虫と蜂の卵を一緒に食べてしまうと述べる。彼はこうした蠅の行為はまるで紅巾黒衣の暴漢が林の中で旅人を襲うようなものだという。しかし彼の慍悍敏捷さは確かに佩服すべきで、もしギリシア人が知ったなら、あるいはそれでもってオディセウス (Odysseus) のような狡知に長けた英雄を形容するかもしれない。

中国は古来より蠅に対してはなんの反感も持たなかったようである。『詩経』に「營々たる青蠅、樊に止まる。豈弟の君子、讒言を信ずる無し。」〔「小雅」蒼蠅〕と言い、又「鷄に非ざるに則ち鳴く、蒼蠅の声。」〔「齊風」鷄鳴〕と言う。陸師農の説によれば、青蠅は色を乱すのがうまく、蒼蠅は声を乱すのがうまい、だからこのように言うのだと。伝説の中の蠅は、たとい特に良くはなくても、要するに決して他の昆虫よりももっと卑俗で悪いということはない。日本の俳諧の中では蠅は普通の詩の材料である。少し湿汚の気味を帯びてはいるけれども、とてもよく温暖で賑やかな境界を表現できている。小林一茶はさらに奇特で、彼は聖フランチェスコと同じように、一切の生物を兄弟朋友としたから、蠅も当然その一つであった。彼の俳句選集を見ると、蠅を読んだものが二十首もある。いま二首をあげてその一斑を示そう。一つは、

「笠の蠅、我より先に飛び込めり」

この詩は「帰庵」という題がある。又一首には、

「やれうつな、蠅が手をすり足をする」

わたしはこの句を読むと、いつも自分の詩を思い出して恥ずかしくなる。だがわたしの心情はどうしてもその境地に達することができないから、やはり仕方がないのである。『埤雅』に、「蠅はその前足を交わすを好む、縄を絞るの象あり、……又その後ろ足を交わすを好む」と云う。この描写はまさに前句の注解とすることができる。又紹興の子どもの謎かけ歌に、「烏豆豆のように黒く、烏豆豆のように太く、座敷の真ん中で、坐って鬚を引っ張る」*と云うのも、この現象を指す。（“格”は「的」と云うようなもので、“坐得”はすなわち「坐著」と云う意味。）

ルキアノスによれば、古代にある女流詩人がいて、賢く美しく、名をムヤと言った、又もう一人名妓もこれを名とした、だから滑稽詩人の句に、「ムヤは彼を咬んでその心臓にまで達した」とあるそうである。中国人は何時までたっても蠅とテーブルを同じくするけれども、蠅を名字にする人はいない。わたしの知るところではただ一人か二人渾名に使われたのがあるきりである。（民国十三年、七月。）

※初出：1924年7月13日『晨报副刊』

* 烏豆豆 なぞなぞの原文は「像烏豆豆格烏、像烏豆豆格粗、堂前当中央、坐得拉胡鬚」。烏豆豆 未詳。字をなぞると、黒い首の豆ということになるが、実際にはどんな豆か。